

第 1 回青森県生涯学習審議会会議録

日時	平成 24 年 10 月 17 日 (水) 13:30～15:30
場所	青森県総合社会教育センター 4 階 第 2 教材開発室
出席者	<p>《 委 員 》 敬称略 14 名 野呂 徳治 横内 清信 山上 恵子 澁谷 尚子 太田 博之 中上 千壽子 浮木 隆 田頭 順子 佐藤 江里子 原 英輔 工藤 秀美 境 香織 堀内 彩子 斉藤 雅美</p> <p>《青森県教育長》 橋本 都</p> <p>《 事務局 》 5 名 中野 聖子 (生涯学習課長) 中嶋 豊 (学校地域連携推進監) 渡部 靖之 (企画振興グループマネージャー) 他 2 名</p> <p>《 その他 》 4 名 伊藤 直樹 (学校教育課 学校教育企画監) 對馬 祐之 (総合社会教育センター育成研修課長) 田中 洋一 (総合学校教育センター教育活動支援課長) 他 1 名</p>
内容	1 開 会 2 教育長挨拶 3 案 件 (1) 青森県の生涯学習の現状について ① 「青森県教育振興基本計画」及び「平成 24 年度社会教育行政の方針と重点」について ② 「青森県教育委員会キャリア教育の指針<総論編>」について (2) 審議テーマについて (3) 意見交換 (4) その他 4 課長挨拶 5 閉 会
配付資料	<p>《事前配布資料》 資料 1 平成 24 年度青森県の社会教育行政 資料 2 青森県教育委員会キャリア教育の指針<総論編> 資料 3 第 10 期青森県生涯学習審議会報告書</p> <p>《当日配布資料》 次第 座席図 資料 1 青森県生涯学習審議会設置条例 資料 2 青森県の生涯学習・社会教育に係る施策について 資料 2-1 青森県基本計画未来への挑戦 教育、人づくり分野 資料 2-2 平成 24 年度社会教育行政の方針と重点 資料 2-3 青森県教育委員会キャリア教育の指針<総論編>リーフレット 資料 3 青森県生涯学習審議会について 資料 4-1 青森県基本計画未来への挑戦 資料編 資料 4-2 生涯学習に関する世論調査 (平成 24 年実施) 資料 4-3 平成 23 年度青森県生涯学習関連事業調査の結果 資料 5 第 11 期審議会のスケジュール (予定)</p>

会長、副会長の選出

会 長 太田 博之（NPO法人テイクオフみさわ顧問）

副会長 野呂 徳治（弘前大学教育学部附属教育実践総合センター教授）

（◇事務局 ◆委員）

（１）青森県の生涯学習の現状について

○資料２に基づき、事務局から説明。

（２）審議テーマについて

○資料３～５に基づき、事務局から説明。

（３）意見交換

- ◆ 八戸市社会福祉協議会に勤務している。社会教育の分野では青少年団体関係の経験が長く、八戸市の社会教育委員長もやらせていただいている。
いろいろな団体の方と話をする中で、子ども会でもボーイスカウトでもガールスカウトでも、組織率が低下してきている。一方で、イベントのようなスポット行事で子どもを楽しませるとなると、たくさん参加者が集まる。団体に入ることの意味・メリットを若い親に分かってもらえず、団体に加入したがる傾向がある。
- ◆ 生まれも育ちもつがる市車力、社会教育に携わって２０数年になる。今でも総合型地域スポーツクラブ、カラオケ、バンド練習など３日に１回は出歩いている。
教育委員会は学校教育と文化財だけ担当して、ほかは市長部局に任せればどうかと、過去に職場で話になった。産業経済課でも農業課でも健康福祉課でも、そのほか社会福祉協議会など、昔から社会教育でやってきたような事業を様々な部署で行っている。では、生涯学習課は何をするのか、新たな企画を立案するのか、再考していく必要があると思う。
- ◆ あおもりNPOサポートセンターは、NPOの中間支援組織として、新しい公共支援事業、復興支援のためのコミュニティビジネス事業、廃校活用事業などを行っている。NPOでの視点のほか、私自身、母親であり主婦でもあるので、様々な視点で生涯学習を考えてみたい。
実情としては、２０～４０代という働き盛りは忙しく、自分のために学習に割く時間がないのではないかと。県全体での生涯学習に対する満足度を上げるためには、２０～４０代が少しでも自分のために時間を割ければ変わってくると思う。
- ◆ 肩書きはラジオパーソナリティになっているが、FM青森で毎週日曜朝９時から「あいことば」という、絵本の朗読やリトミックなど子ども向けのラジオ番組を８年続けている。ラジオは聞きながら何かできる媒体なので、聞くことに集中しなくてもよい。親子で触れあいながらラジオを聞くことで、何か一つでも参考になればという想いでやっている。
私自身、クリスマスに「大人のための朗読会」を企画実施しているが、絵本を通し

た活動も生涯学習のひとつだと気づいた。「生涯学習」を平板で発音するより、生涯にイントネーションを置いて発音すると、わかりやすく感じる、しっくりくる。

私も子供が2人いるが、仕事が忙しくて子どもの面倒を十分に見られていない。若い女性、主婦層の生涯学習に対する満足度が低いということだが、若い年代の満足度を高めるといことが、難しいけれど最も重要で、例えば、この層のロコミカを生かすことなど考えていけたらと思う。

- ◆ P T Aの母親委員長になって4年になる。いろいろな会議に呼ばれることが多く、まさに今生涯学習していると感じている。子どもたちが就職難だったこともあり、子どもたちが社会に飛び立てるような学習を支援できればと考えている。
- ◆ 企業組合でそれでは、津軽鉄道の津軽五所川原駅でコミュニティカフェを運営している。コミュニティカフェは、地域の課題をビジネスで解決していこうという考え方で、コミュニティビジネスを実践している。普通のカフェとの違いは、地域の課題を解決していくことを念頭に置いていること。
生涯学習に関連するものとしては、就業力育成事業で弘前大学の学生を受け入れており、今年で3年目になる。子どもたちのコミュニケーション能力が低いと言われていたが、大学生も最初は自分の思いを口に出せない。これでは就職面接に行ってもダメだよと、半年の研修期間中、少しでも社会に出ていくときの心構えを教えていきたいとやっている。
そのほか、場があるという強みを生かし、しゃべり場、高校生まちづくりクラブのほか、若いお母さんが集まりやすい時間帯には趣味の集まりを企画している。
県や国の事業で学習の機会を得てこの世界に飛び込んだ。自分が経てきた道を、若いお母さんたちにも伝えていきたいと思う。
- ◆ 普段は保育園で子どもたちと楽しく過ごしている。その傍らで八戸市社会教育委員の他、八戸市国際交流協会にも所属し、機関紙を発行したりしている。また、八戸地域社会研究会の事務局をさせてもらって、まちづくりの勉強もさせてもらっている。公民館活動では、未就園児に対する支援や、寿学級でのレクリエーションなどもやっている。
生涯学習は、自分自身に時間や気持ちのゆとりがないとできないのかなと感じている。自分自身にゆとりがあって、初めて生涯学習をスタートできる。生涯学習を始めるきっかけとしては、いろんな職種の人と出会い活動することで、その業界だけでは学べないことを学べるなど、縦・横のつながりが大きい。例えば公民館を身近に感じて、学べる場を増やすなど、若い人から年配の方まで集えるような公民館になればと思う。
- ◆ 会社勤めしたことのない普通の主婦が、たまたまP T Aのトップになったことから始まって、ボランティアや男女共同参画の委員など、いろいろな活動に引っ張り出されて、いつの間にか白銀公民館長になっていた。市内でたった一人の女性館長で、初めての館長会議に出た時は、男性ばかりで辞めようと思った。でも、負けん気で取り組み、気付いたら8年目になって、今では4人の女性館長がいる。館長としての仕事は、30代～40代までの子育て期間での経験がすごく影響している。
- ◆ 肩書きは農業経営士会副会長だが、本業は酪農。約140頭の牛を飼っているほか、

牛乳を加工し販売している。斗南丘酪農では400ヘクタールの開拓地があり、今年で70周年を迎える。農業関係のほか、PTAにも関わっていたが、未だに生涯学習というイメージがしっくりこないところもある。

生涯学習に対する満足度、不満については、生活環境という部分、余裕ある地域と余裕ない地域で割合が変わるのではないかと感じている。下北は、生活がそれどころではないという人が多く、生涯学習できる場があってもなかなか行けないという側面もあるのかと思う。別な見方では、余裕がある人、例えば年金をもらって仕事も退職した人が行う生涯学習という考え方が強いのではと思う。第10期で2年間、審議会に参加させてもらったが、生涯学習は県民全体が対象になっていて、誰でも気軽に参加できるものだという、生涯学習の考え方を知らない人が多すぎるのが一番の問題ではないか。

もう一つ問題意識として持っているのは、子育ての考え方とか、子どもの接し方が世代間で上手に受け継がれていない社会になっているということ。最優先で手立てし、次の世代に繋いでいく必要あると感じている。

- ◆ 御縁があってこのような会議に参加する貴重な機会をいただいたことに感謝したい。小さな史料館で学芸員として勤務し、館運営全般に携わっている。いろいろな人が来館するが、年代層に合わせて分かりやすく伝えることを意識している。そのときの「あーわかった」というキラキラした様子を見るのが嬉しい。自分の住んでいる町の魅力を再発見し、誇りを持ってもらうことで、まちづくりのお手伝いをさせてもらっている。

生涯学習は幅広いが、基盤でもあり、人生を豊かにするものでもあり、気づきの場所でもある。また、様々な分野につながるものだと思う。

学芸員は、地域に寄り添って、地域の人たちが生涯学習やいろいろな活動を通じて、生き生き暮らせるお手伝いになる仕事だと思っている。三沢市は、人口の割に文化施設が多い。個々人が学ぼうとする意欲を磨き、力をつけて頑張ろうという源が生涯学習だと思う。

生まれは弘前市だが、青年プロジェクト塾という弘前のまちづくりにも参加している。一人一人が、私にもできるかもしれないと思い、いろいろな人がつながり活躍できる場所づくりが大事なのではないか。博物館は、いろいろな人が集まれる場所である。まちづくりと博物館、いろいろなことにつながるようにしていきたい。そうして青森県が元気になってくれればと思う。

- ◆ 審議会委員就任の話を受けた時、正直戸惑ったが、こうして皆さんのお話を伺い、説明をいただいて、とてもよい機会をいただいたとありがたく思っている。特別支援学校に長く勤務してきたが、女性として、母として、これまでの経験で何かお役に立てるのではと思い、お引き受けした。

人と人のかかわりを生かしていく、元気な地域、元気な青森を目指していけば、日本も何とかなるのではと思う。

障害のある子どもたちも様々であり、多様化もしているが、昔と違って施策的にも良くなってきていると感じている。それでも、やってもらうだけの人間ではなく、自分から社会に出ていくという子どもたちであってほしいと願っている。もちろん段階は必要だが、親子ぐるみで地域に出ていき、共生社会の実現に向けて障害のある子どもたちが進んで参加できる社会に、という視点からも生涯学習というものを考えていきたい。

個人的には定年も近付いているが、子育て真っ最中の方に元気を与えられるような施策が機能するよう、リタイアした年配者は何ができるかという視点からも考えていきたい。

- ◆ 社会教育センターで県民カレッジの立ち上げに関わったほか、教育事務所に勤務するなど、通算で10年社会教育に関わった。今は小学校で子どもたちの生きる力の育成に全力を挙げている。

自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し行動し、よりよく問題を解決する実践力を身につけていく。これは、生涯学習と何ら変わらないと思う。言い換えれば、学ぼうとする力、学習意欲、学んでいく力、課題解決能力などが子どもたちに身につくように学校教育と生涯学習とを結び付け、自分自身が社会教育に携わった経験も踏まえて、学校教育に関わっている。

全校朝会で「一つでも二つでもいいから好きなことを持ちなさい、好きなことからアンテナを張っていけば次から次へ広がっていく、そういう体験をしてほしい、それが自分の生活を楽しくする」という話をした。小学校から考えることで、生涯学習社会の構築につながっていくのではと思っている。

このほか、学校だより等で、学校から地域へ情報発信する機会があり、家庭教育に関する情報の発信にも努めている。学校教育の立場から、自分の経験が審議会に生かせればと思っている。

- ◆ 弘前大学教育学部附属教育実践総合センターは、学校教育現場の先生方と共同して例えば授業研究や教科外活動等の質の向上を目指して、教育実践研究を進める部署である。私は、大学生の特別活動実習という教育実習を担当している。授業実習ではなく、教員を目指す学生が少年自然の家等で小・中学生の子どもたちの自然体験活動を支援するという、教科外の活動実習である。

私自身、高校教員を長く務めていたこともあるが、なかなか高校生、大学生に生涯学習の考え方が理解されていないと感じている。小学生に対する働きかけをしているという紹介もあったが、高校や大学でも生涯学習の理念を教える必要があるのではないかと。

高校教員の頃を振り返ってみると、どうしても上級学校への進学、企業への就職などの進路指導ばかりで、生涯学習という考え方をどれくらい生徒に訴えられたか忸怩たる思いがある。大学生を見ていると、大学を出た残りの人生、ずっと生涯学習を続けていくという感じは見受けられない。

生涯学習社会の実現のため、学校教育にも働きかけていくことが必要。学校教育本来の諸活動と生涯学習がオーバーラップする部分もあろう。

このほか、今回テーマになるかは別として、教育委員会での生涯学習課の位置づけや役割など、社会教育にシフトしていることは分かるが、生涯学習という名称をつけている以上、この審議会でも考えていく必要があるのではと感じている。

- ◆ NPO法人の顧問を務めているが、18年度から県立三沢航空科学館を指定管理者として運営している。現在2期目に入っているが、経営方針の基本に「子どもからお年寄りまで一人でも多く関われる科学館・コミュニティミュージアム」と銘打って、地域とのつながりを経営の土台にしていこうと頑張っている。

第9期からの2期4年間、この審議会で学ばせていただいて最近すごく思っているのが、自分の意欲をチャンスとして生かす時間や余裕がない、だからなかなか生涯学

習のきっかけができないということ。多くの仕事を抱えている中ではあるが、ワークライフバランスを見直すことで、もっと生涯学習に参加する人たちが増えていくのではないか。若い人、女性の話なども出たが、30～50代の男性からすると、「学習」という言葉は何か「勉強」みたいな感じで、どうも避けたがる傾向があると思う。しかし、これから会社を担っていかなければならない、家庭を守っていかなければならない、そうなったときに地域に出ている人々と関わる、生涯学習に参加するなど、生かす場やきっかけというのは、(潜在的に)たくさん持っているのではないか。そういった力を、ワークライフバランスを取りながら学ぶ機会を与える、意識改革もそうだが、それを生かす場所、生涯学習してよかったと思える方向になればと思う。一人一人の学びの種は、青森県を元気にする根本ではないかと思っている。

- ◆ 今日は審議テーマを絞り込まないが、皆さんの問題意識の中で優先順位のようなものも出てきているのではないか。ここからはフリートークの形で進めたい。

若い女性は時間がなくて生涯学習に参加できないとのことだが、一方ではPTA活動は、ほとんどが女性。生涯学習とか、何か学ぼうとなると参加者が少なくなることについて意見はあるか。

- ◆ 学びの種というお話をされていた方がいたが、私にしてみれば、この場にいることが生涯学習で、「知らない世界を知る」ことが楽しいと感じている。これを面白いなと思えば得だなと思って参加させていただいているが、周囲の人から見れば「よく2時間も我満できるな」という見方をする人が多い。学びの種が転がっていても、それを手に取ろうとする人が少なかったり、手に取りたい人たちこそ時間がなかったりする。ボランティア活動は、気持ちに余裕がないとできないことだと感じているが、例えば主婦で、時間がなくて参加できないと思っても、最終的にボランティア活動に参加して小遣い稼ぎになるなど、ビジネスに発展するようなことであれば、特に主婦層は参加したいと思う人がいるかもしれない。お金に関しては女性の方がシビア。参加して学ぶことがビジネスに、という楽しみの転換ができる形を考えられたら面白いかなと思う。

- ◆ コミュニティビジネスの話も出たが、生涯学習の中にも、いろいろな活動をしているグループから、ビジネスに至らないが、周囲の協力を得ながらNPO法人を立ち上げたという例もある。事例を1～2つ御紹介いただければ。

- ◆ (ボランティア活動を) ビジネスに発展させるのはなかなか難しい問題で、企業組合にする前は、3人で出資して個人経営という形でスタートした。そのときにスタッフとして入ってもらった方々は、私の気持ちとしてはコミュニティカフェというものを理解して参加してもらっていると思っていたが、やはりお金はシビアだった。だんだん時給いくらかという発想になってくる。

有償ボランティア的な発想でいくか、それともビジネスとして収益を考えていくか。私たちの場合は、長年NPO法人を運営してきた人が、自分たちが本当にやりたい事があって、補助金とか助成金に頼らないとできなかつたが、本来、自分たちがやりたくて獲得した助成金なのに、助成金を受け取ると様々な縛りがかかって自由にできないという、自分の中で限界を感じるがあった。

何とか自分たちのやりたいことを自力でやっていく方法はないかと考えた結果、コミュニティビジネスの考え方にたどりついた。今でこそ同じ考え方の人は増えてきた

が、当時はなかなか理解されなかった。

自分が学ぶために、あるいは自分の喜びのためにこれを行っているのだから、時給が他より低くてもいいと思えてやれるかどうかだと思ふ。この気持ちを持ち続けるのはすごく難しいと思った。給料をもらった途端、お金のために働くというのがままある。

(働く＝稼ぐ、という考えが根強いが) お金にはならない満足感を売る、ということを知って分かってもらえればと思ふ。

- ◆ 自分たちが学んできたものを生かす環境を考えた時に、やはりお金が必要だ。行政の補助金頼りだと、補助金がなくなったときに事業が継続できなくなってしまう。例えば自分たちで自分たちの(自由な生かす場所にするために)お金を集めてフィードバックする活動というのは多くある。若い人たちが生涯学習に目を向けるという点では、大きな切り口になると思ふ。

例えば、夢を育む教育支援フォーラムの講師をされた若江さんは、株式会社化して、学校と企業、いわゆるキャリア教育の結び付けを行っている事例もある。

そもそも論として、生涯学習を知らない人が多いという意見もあったが、何か意見はあるか。

- ◆ (生涯学習という)イメージを変えていかなければということを出して、生涯学習という言葉のイメージを定着させていくのか、それとも、個別の施策を出して参加率を上げていくのか。

若い女性の話が多く出ていたが、現在の生涯学習関係事業だと、家庭教育とか子育て支援に関する事業が増えている。それぞれの事業効果は出やすいが、生涯学習を推進する上でこういうやり方や構成でいいのか、大局的な視点で話し合いができればいいと思ふ。ただ、話し合いを終えた頃には来年度の事業が決まっていたりもするので、新しい視点での意見は早めに提案していくということが必要なのではないか。

- ◆ 皆様のお立場、経験から貴重な御意見をいただいた。事務局で議論を整理いただき、次回のテーマを絞る上での参考とさせていただきたい。

- ◇ 簡単に意見を整理すると、30～40代の女性の生涯学習への参加、ワーク・ライフ・バランスという視点、青森県が元気になるような生涯学習が必要、障害のある子どもたちも含めた生涯学習という考え方の学校・子どもたちへの働きかけ、公民館での学習活動から豊かにしていく、コミュニティビジネスという視点からの生涯学習の捉え方、生涯学習を推進するための施策はどうあるべきか、など。

(4) その他

- ◇特になし